

# 古代インド思想史と近代宗教人類学史の発展的類似性（要旨）

## Parallel development between Indian philosophy and religious Anthropology (Summary)

### —宗教“研究史”の発生論的アナロジー—

久保田 力

KUBOTA Chikara

主に古代インドの思想を研究対象とする、いわゆるインド学（Indology）と、宗教学・人類学—宗教研究には実際は宗教人類学・宗教社会学・宗教心理学・宗教哲学・宗教現象学・民俗学など多様な形態があるが、細分化された諸領域の歴史的・系統的な総称としてここでは便宜上そう呼ぶ—という二つの大きな学的領域は、現在ではそのそれぞれが専門的に細分化されていく傾向にある。そして、二つの学の成果は、ますます独立的な知識として互いに交流を深め合うことなく別々に蓄積されている。マックス・ミュラー（1823～1900）を近代宗教学の創始者と見るならば、宗教学・人類学の基礎はむしろインド学の方にあるという見方も可能であろう。何故なら、M. ミュラー以前にインド学研究は既に始められていたからである。彼の師は、ユージェヌ・ピュルヌフ（1801～1852）であったことも想起する必要がある。両学の知の交流（意識）は、1920年代頃までは存在したと思われる形跡があるが、同時期のイギリスの機能主義人類学の輝かしい登場以来、両者の関係は急速に疎遠化した。つまり、宗教史学の終焉とともに、フィールドと文献という研究対象の明瞭な差異化によって両者は完全に二極分解を起こしたということができる。もはや両者を再び邂逅させる道は全く不可能なのであろうか。ここでは、インド学の立場から、私なりに問題提起の可能性を探ってみたい。

インド学の方がその歩みを開始した時期はやや早かったにせよ、インド文献学と宗教学（Science of Religion, comparative religions）両者の本格的な成長はともに19世

紀後半（特に1870年代）からである。さて、インド文献学に関しては、現実には、ヴェーダ学や哲学諸学派を中心としたインド哲学と、そして、仏教学とに大別される。仏教学も、原始仏教・アビダルマ仏教・大乘仏教・密教というように大別される。ここにひとつの疑問が生ずる。すなわち、それら各領域ごとに蓄積される精緻な文献学的成果を個々年代順に羅列すれば、それがそのまま“インド思想史”と呼べるものになりうるのであろうかということだ。現に、今まで著されてきた『インド思想史』（もしくは『インド哲学史』）なるもののほとんど全てはこのような種類のものである。ただ、著名な『インド思想史』の若干は比較思想・比較哲学への視点が加味されている。比較思想自体に一定の確立された方法論があるかどうかは大いに疑問視されるであろう。とすれば、従来の“インド思想史”は本当に思想史なのか問われるべきである。文献学の知を年代順に並べ立てるだけでは、考古学的遺品の陳列とさして変わりはない。ましてや、研究史及び各種ビブリオグラフィーの著作状況が語っているように、“インド哲学（史）”と“仏教（史）”は別々に論じられることの方が圧倒的大勢を占める現実なのであって、特に、後者は独立する傾向が強い。グプタ王朝（4世紀）以降のインドの哲学的論書の中には、異教思想と対決する論争が含まれているのは確かだが、それは文献内部における当時の宗教神学の実状の反映であって、われわれのいう思想史とは直接には関係しない。

インド哲学と仏教学を有機的につなぐ努力は、むしろ、

一部のすぐれた学者たちによってなされている。彼らは西洋哲学思想の知見をも取り入れて東洋思想と対比させる仕事を、一個人のうちの主体的な問題として自覚しつつ、「比較思想」という形によって表明してきた。このような試みは、今後もつづけられるであろう。それは是とするも、ここで指摘しておきたいことは二つある。まず、これまでの比較思想・比較哲学の成果においては、宗教人類学的な知見や方法がほとんど有効に活用されていないということである。人類学の視点の導入は、ややもするとひとりよがりな思索に陥りがちな比較思想の短所を是正する側面を持つものと予想される。

第2は、文献学知の各到達点を鳥瞰的にファイル・アップする方法に基づく“インド思想史”は、希有なる才能に恵まれた学者のみに許された特権的で崇高な知の所産であってよいのだろうかということだ。もし、そうであるなら、そのような“インド思想史”は、西洋哲学において、ヘーゲルが初めて絶対精神（*der absolute Geist*）の自己実現過程としての『哲学史』を著したのと同様の志向性をもった、同じく偉大な精神の所産となるはずだ。意義は多少異なるにせよ、それはヘーゲルの『哲学史』の理念の延長線上に存する主体的なものであると思われる。

そのような偉業に属するものとしてではなく、しかも誰でもが容易に近づきうるインド思想史への見方は模索できないか。以下に略述する構想は、1982年に、ロンドン大学社会人類学科において私がほんの束の間人類学と出遭った経験に基づいた、個人的な印象にすぎないものだが、もうひとつの“インド思想史”を考えるヒントのようなものになりはしないかと思案しているものである。

奇妙なことであるが、宗教学の嫡子として王道を歩みつづける人類学の知見に、先述したように、比較思想の大家ばかりでなく、インド（文献）学者一般もまたあまり注意を払わない傾向が強い。人類学は自己完結的な学問体系というよりも、それ自体が学際的研究に応用されるべき方法論であるとも言っている側面を持っている。

宗教学者にとっては自明のことであろうが、その学説史の流れとしては次のような理解があるはずだ。すなわち、19世紀末から20世紀初頭にかけては、通常、宗教学とされる時代がまず形成された。内容的に、宗教起源論の時期とも言われる。そこでは、三つの代表的な説が唱えられた。第1は、E. B. タイラーに代表されるアニ

ミズム説。第2は、R. R. マレットに代表されるマナイズム説。第3は、A. ラング（後にはW. シュミットら）に代表される原始一神教である。現代でもこの時代の概念は死滅したわけではなく、宗教類型論の枠内で活用される。1920年代には、マリノフスキーやラドクリフ・ブラウンを旗手とする機能主義人類学が台頭した。そして、1960年代以降は、レヴィ＝ストロースを軸に構造主義人類学が登場する。（ポスト構造主義は、その命名が示す如く、構造主義に取って替わるものでは未だないと思われるので、今は立入らない。）以上のような粗描によって語られる宗教学・人類学の発生的経緯には何らかの意味づけが可能であろうか。

さて、一方、『インド思想史』と『仏教史』が共有する最大公約数的な思想の流れを、主に『仏教史』側から見るとすれば、大旨次のような三つの段階が想定されよう。すなわち、まず、最初期のヴェーダ・ウパニシャッドの時期において、「かの唯一なるもの」（*tad ekam*）（『リグ・ヴェーダ』）やブラフマン・アートマンなどの最高実在への探究がなされた段階。そして、原始仏教を第2とし、大乘仏教を第3の段階とする。

ここで、宗教学・人類学の学説史と、上のインド宗教思想要約史という二つの学的成果の展開過程の中には、アナロジカルな共通性が見出されることに気づく。以下に3段階の類比を示す。

#### 〈第1段階〉実体(=起源)論的アプローチ

アニミズム＝「霊的存在への信仰」、超自然力＝マナへの信仰、原始一神教＝至高神への信仰、といった説を主とする宗教起源論は全て、何らかの実在的存在への実体的信仰形態とみなしうる。これは、バラモン教の梵我一如等の信仰形態に対比される。

#### 〈第2段階〉現実(=機能)主義的アプローチ

フィールド重視の立場で、社会における諸制度の機能や役割に焦点をあてて、多くの場合、反歴史的（非歴史的）な考察となる機能主義人類学。これは、霊魂などの形而上学的な絶対原理としての諸命題を排し、五蘊無我説や縁起説・四諦説・中道説等を駆使して、実人生における人間のなすべきことを主張したゴータマ・ブッダ及び原始仏教の立場に対比される。

#### 〈第3段階〉深層構造(=本質)主義的アプローチ

未開と文明に関わらず、人間精神に普遍的に潜在する深層構造を抉り出そうとする構造主義人類学。これは、や

はり、人間精神や人間性の深層構造及び世界の全体性の本質を探ろうとした唯識（アーラヤ識）、中観（空）、如来蔵（仏性）思想などの大乘仏教や密教（大日如来）の問題意識の呈示の仕方に対比される。

以上のような視点に立つならば、ある意味では、「インド学・仏教学」と「宗教学・人類学」という二つの異なった近代的学問の展開の軌跡は全く同じことがらを物語っていると解釈できるのである。ただ、両者の使用する言語（概念）が異なっているだけだ、と。（下図参照）

\*上記の問題を、『シリーズ・宗教への問い』（岩波書店）の第5巻『宗教の闇』所収（2000年、3月刊行予定）の拙論で、やや詳しく論じておいた。

[本稿は、東北芸術工科大学・平成10年度特別研究費による研究成果の一部である。]

	《第一段階》	《第二段階》	《第三段階》
宗 教 学 人 類 学	<b>宗教起源論</b> *アニミズム（霊的存在への信仰） *マナイズム（非人格的・超自然力としてのマナへの信仰） *原始一神教（原初的な至高神への信仰）	<b>機能主義人類学</b> *フィールド・ワーク重視 *反歴史的考察＝絶対的原理の否定 *社会全体における諸制度の機能 *個人心理的アプローチ — マリノフスキー *社会科学的アプローチ — ラドクリフ・ブラウン	<b>構造主義人類学</b> *二分法に基づく対位法的考察 *人間精神の深層構造抽出 *隠された普遍的制度・秩序の分析 *変換による全体の把握
アナロジー	実体（＝起源）論志向 → 現実（＝機能）志向 → 深層構造（＝本質）志向		
インド学 仏 教 学	ヴェーダ・ウパニシャッドの思想 *万物の根源「かの唯一なるもの」（『リグ・ヴェーダ』） *霊魂としてのマナス（意）、アス（霊）、プラーナ（氣息）（ブラーフマナ文献） *アートマン（我）、ブラフマン（梵）（ウパニシャッド文献）	<b>原始仏教の思想</b> *五蘊無我説＝絶対的原理の否定 *縁起説＝相互依存関係 *四諦・中道説＝実人生における人間のなすべきことを現実的に指摘 *形而上学的命題の排除 *個人的行為主体の重視 — ゴータマ・ブッダ *ダルマへの還元的実在論 — アビダルマ仏教	<b>大乘仏教の思想</b> *有・無、世俗・勝義など二分法による止揚的考察 *人間の心・人間性の深層構造の抽出 *世界の全体性の本質・秩序の分析 ○ 空・無自性 — 中観派 ○ アーラヤ識 — 唯識派 ○ 如来蔵 — 仏性思想 ○ 大日如来 — 密教